校長室だより　　平成18年6月29日

第 89 号　**榎並っ子**

大阪市立榎並小学校長　小林　恵子

子ども見守り隊のみなさまに感謝

２２日の児童集会の時、講堂に、子ども見守り隊のみなさまをお招きして、全校の子どもたちに紹介すると共に、毎日安全に登下校できるよう尽力いただいていることに対して感謝の気持ちを伝えました。

当日は、２１名の子ども見守り隊と３名の城東区役所地域安全対策のみなさまが来られ、舞台に上がられました。

はじめのことばの後、一人一人のみなさまが自己紹介をされました。次に、子ども見守り隊の代表の方より①昨年の９月から子どもたちが安全に登下校できるよう活動を始めてから１０か月も経つこと②朝会ったら元気な声であいさつしてほしいこと③下校の時には、お年寄りの方が、子ども見守り隊として立っておられるので「さようなら」「ただいま」などのあいさつをしてほしいこと④危ないのでふざけて車道に飛び出さないようにしてほしいことなどを話されました。子どもたちは、真剣に話を聞いていました。

続いて、全校の子どもたちを代表して６年生が、次のようなお礼のことばをとても上手に述べました。

「子ども見守り隊のみなさま、いつも、私たちが安全に登校や下校できるように見守っていただきありがとうございます。どんな寒い日でも、どんなに雨が降る日でも、また、どんなに暑い日でも、やさしい笑顔で元気のよい声で、私たちを見守っていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、私たちは、今まで以上に安全に気をつけて過ごそうと思います。」

子ども見守り隊と城東区役所地域安全対策のみなさまは、お礼のことばをうれしそうに聞いておられました。「最後に、登校や下校の時などに、榎並小学校の私たちの安全を守り、安心して地域で生活できるように、目と心を配ってくださいます見守り隊のみなさまに『これからも

よろしくお願いします。』という気持ちをこめて、大きな拍手をおくりましょう。」ということばに送られ、子ども見守り隊と城東区役所地域安全対策のみなさまは、講堂を後にされました。

子どもたちは、多くの地域のみなさまが、見守ってくださっていることを実感し心強く思うと同時に、感謝の気持ちをもってくれたことと思います。

〔鋭い子どもの目〕 －親子のあり方を考える－

ある新聞を見ていると「子を思う親の注意に感謝」と題して中学生（男子）が次のように述べていました。考えさせられる内容でしたので紹介します。

「この頃、ニュースでよく家族内のトラブルで発生する家族同士の殺人事件を見ます。中でも『子どもが親を殺す』という考えられない事件がほとんどです。では、なぜ、こんなことが起きるのか原因を考えてみました。

親は、子どものことを思い、注意します。けれども子どもは、適当にことばを返して、親の願いも知らずに注意を聞き流します。このやりとりを何度か繰り返すと、子どもはだんだん嫌気がさして、それがだんだん殺気に変わり、ついには殺人に至ってしまうというわけです。

僕が不思議なのは、親を殺してしまうということです。僕も親にああしろこうしろと言われ嫌気がさすことがあります。しかし、自分が大人になり困らないように注意しているのだな、自分を思って言っているのだと思えば、逆に、『ありがとう』とことばが出てきそうです。こう思うことで、親の見方も変わると思います。」

「親の心子知らず」（子どもを思う親の愛情を少しも悟らずに、子どもは、あさはかな考えで反抗したり、勝手気ままなふるまいをしたりするものだということ）「子を持って知る親の恩」（自分が親になり子どもを育ててみて、はじめて親のありがたみが分かり、親の恩をつくづく感じるということ）ということわざにもあるように、親の思いや願いを子どもに伝えることは、昔からなかなか難しかったようです。紹介した中学生の新聞記事を基に、親子でゆっくりと話し合い、親子の意志疎通を図ることが、耳を疑うような事件を起こさないために大切なことではないかと思います。